

移民第二世代青年期のエスニシティ間比較 (1)

—調査研究の概要とインドシナ難民の事例—

日本女子大学 清水睦美

1. 調査研究の概要—目的・方法—

日本社会に住む外国人の増加という現象が始まって以来、およそ 30 年が経過し、親の移動に伴って来日し、日本の学校教育のもとで育った外国人の子どもたちは、現在、青年期から壮年期を迎えつつある。と同時に、親の移動後に日本で生まれた子どもたちも青年期を迎えつつある。すなわち、移民の第二世代が第三世代を育む時期を迎えているのである。しかしながら、このような移民第二世代に焦点をあてて体系的な調査を行い、かつ、エスニシティ間比較を試みた研究は管見の限り見当たらない。

本調査研究では、ポルテスらの研究 (2001=2014) を手がかりに、ベトナム、カンボジア、中国、ブラジル、ペルー、フィリピンにルーツをもつ 1. 5 世や 2 世に対して、移動歴、学歴や学校経験、仕事歴や仕事経験、定位家族・エスニックコミュニティ・出身国との関係、将来の見通しなど、かれらの生活を包括的に捉えるインタビューを継続中である。

本報告では、研究チームとして 5 つの報告を行う。特に、エスニシティ間比較として注目するのは、第一世代の編入様式の違いで、その違いが第二世代が獲得する資源に与える影響と、それらの影響を受けつつ営まれる第二世代の青年期の特徴を捉えることを目的とする。

2. 本報告の概要—結果—

第 1 報告の対象者は、第一世代がインドシナ難民であった者で、特に、ベトナムとカンボジアにルーツをもつ第二世代の青年期に焦点をあてる。分析結果としては、以下の諸点を指摘できる。(1) 第二世代は、第一世代の移動経緯を理解し、その苦労に敬意を払い、移動を肯定的に捉えている。ただし、第二世代の学歴取得や地位達成に、親は無力であり、自力で何とかするしかない捉えている。(2) 「親の無力と自力」をベースとする第二世代の学歴取得や地位達成は、学校や地域で親代わりとなるような日本人との出会いに大きく依存している。(3) 「親の無力と自力」をベースとする第二世代の文化適応は、3 つに分類できる。一つは、自身のルーツを否定的に捉え、日本人化を志向する傾向である。ルーツがベトナムやカンボジアであることを一定期間隠す、あるいは、ひどく嫌うなどの経験をもつ者で、継承言語が聞くレベルにとどまり、親ともコミュニケーションも不活発である。かれられの多くは日本人の支援を大きく受けることもできないままであり、結婚相手を、日本人とするか親の紹介による呼び寄せとするかに思い悩む。もう一つは、日本人化の傾向にありつつも、かれらのルーツを理解する日本人に出会うことで、継承言語が獲得できずとも、自身のルーツを肯定的に捉える者である。親とのコミュニケーションも、自身が継承言語をあらためて学習するなどして、不活発さを補う様子もうかがえる。結婚相手は自身の選択として理解されている。もう一つは、「親の無力と自力」のもと学校不適応になり、学校制度を利用した就職の機会に恵まれず、結果として、第一世代のエスニックコミュニティで提供される仕事で生計を立てている場合である。日本語も継承言語も話す聞くレベルにとどまっている。結婚相手は、第一世代の紹介による呼び寄せが中心となっている。

文献

Portes, A. & R. G. Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, New York: Russell Sage Foundation. (=2014, 村井忠政他訳『現代アメリカ移民第二世代の研究—移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店.)

謝辞 本研究は科学研究費補助金基盤研究 (B) 26285193 の助成を受けたものである。